

心理学教育のための教材研究Ⅲ

—マグニチュード推定法を題材とした心理統計演習—

堤 幸一 (教育心理学科)

A Study of Teaching Materials for Psychology Education III: Psychostatistics Exercise using the Method of Magnitude Estimation

Koichi TSUTSUMI (Department of Educational Psychology)

抄録

心理学研究でも心理学教育でも心理統計法は重要な地位を占めるが、学修者には広く苦手意識がある。また統計ツールとしてのPCおよび統計システムソフトの普及と高性能化は便利さをもたらすとともに、統計基礎理論の力とそれに基づく活用力に空洞化をもたらした。本報告では心理学教育のための教材研究の一環として、心理統計法の重要概念である「相関と回帰」について体験的な理解と練習とを目指したアクティブラーニング(以下AL)式の演習に利用できる教材の開発、実施上の問題点などの検討を試みた。

キーワード 心理統計法教育、教材研究、マグニチュード推定法

I 背景と目的

心理学研究におけるのと同様、心理学教育においても、心理統計法は重要な地位を占める。それは心理学を科学として成立させるための不可欠な要素である。しかしながら文系のイメージの強い心理学科へ進学してきた新生には数学に苦手意識を持つものも多く、その流れのまま、数式を大量に扱わないといけなと思われる統計法を敬遠しがちである。2013年の本学の心理統計法受講生への調査でも、数学が不得意であると40%以上のものが回答しており、星名(2011)もeラーニング教材導入の効果についての研究の中で、統計学に対する苦手意識を調査し、89.9%の学生が「苦手意識がある」、「やや苦手意識がある」と報告している(類似の指摘は、村井ら, 2009; 大橋, 2009; 塗師, 2009にもある)。

また、従来、それらの手法について基礎的な理論と実施方法の学習を行った上、かつ手計算や電卓・大型電子計算機などを道具に多大な時間と労力を費やさなければ適用できなかった高度な統計の手法も、PCの普及と高性能化に伴い、誰でも比較的容易に実施できる環境が整備されてきた。このこと自体は喜ぶべきであるし、これらの適切な活用法の教育も重要であろう(塗師, 2009)。しかしながら、基礎的理論の学習と経験的理解を経な